月刊みんぱく

2022年
2月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和4年2月1日発行 第46巻第2号通巻第533号

国立民族学博物館
National Museum of Ethology

特集

日本列島の文化の多様性

―佐々木高明の世界からの展望

佐々木高明の見た日本　池谷 和信
東アジアの食　佐藤 洋一郎
アイヌから見た日本　関根 達人
焼畑から見た日本　米家 泰作

月刊みんぱく
2022年
2月号

目次

1 エッセイ　千字文
ガラパゴスの旅
福岡 伸一

特集
日本列島の文化の多様性
――佐々木高明の世界からの展望

2 **佐々木高明の見た日本**
池谷 和信

4 **東アジアの食**
佐藤 洋一郎

6 **アイヌから見た日本**
関根 達人

8 **焼畑から見た日本**
米家 泰作

10 みんぱく回遊
日系アメリカ人の足跡を探る
丹羽 典生

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
コロナ禍の韓国における「安心」の感覚
諸 昭喜

16 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
籠再発見
浦 蓉子

18 シネ倶楽部 M
そしてドラマは続く、問題も続く
――「テルアビブ・オン・ファイア」
菅瀬 晶子

20 ことばの迷い道
市場のことばは貧しい？
中川 理

21 編集後記・次号の予告

表紙
熊本県五木村にて焼畑調査中の佐々木高明
（1960年、X0399000）

エッセイ 千字文

ガラパゴスの旅

福岡 伸一（ふくおか しんいち）

二〇二〇年の早春、コロナ禍が世界を覆い尽くす、その寸前に、絶海の孤島ガラパゴスを探検することができた。一生に一度でいいからガラパゴス諸島に行ってみたいというのは生物学者として長年の夢だった。かのチャールズ・ダーウィンが、一八三五年、艦船ビーグル号に乗って、この場所に到達、後の進化論につながる着想を得た場所だからだ。ダーウィンが見た光景を追体験したいと思った。

日本では「ガラパゴス化」あるいは「ガラケー」などといって、世界の潮流とは異なる独自の進化を遂げたことを揶揄することがあるが、ガラパゴスという場所はその言葉のもとになったように、進化の最前線をたどった、奇跡のようなところなのである。

どういうことか。それは、ガラパゴス諸島が、数百万年前、海底火山の突発的な活動によって、大陸から孤立した場所に、突然生成した全く新しい天地だからである。最初は水も土壌もなかった。焼けただれた溶岩がようやく冷えると、風で運ばれた植物の種のうち、乾燥に耐えることができる苔やサボテンがわずかな雨水によって生育を始めた。

その後、ここにたどり着けたものは、奇跡的な幸運に助けられたほんの一握りの生物たちだった。羽を持つ鳥、泳ぐことができるアシカやオットセイ。そして、流木や藻屑が集まってできた天然のいかだによって流れ着いた爬虫類の卵などである。トカゲの一種、イグアナは水生と陸生にわかれた。海辺を選んだものは海藻を食べ、内陸を選んだものはサボテンの実を食べるなどして独自のニッチを切り開き、自分のすみかとした。淡水を必要とする両生類や大型の哺乳動物は到達できなかった。かくしてガラパゴス諸島は、先行者にとって、天敵や競争相手のないブルーオーシャンとなった。陸ガメは長寿を獲得し、二〇〇年以上を生きる巨大なガラパゴスゾウガメとなった。

チャーターした小船に揺られながら、毎日、何もない水平線から登る朝日を見、何もない水平線に沈む夕日を眺め、夜は満天の星を見上げた。星がありすぎて、星座がかき消されるほどだった。いかに人間が文明や都市に依存して生きているか思い知らされた。星座もまた人間が作り出したものにすぎない。

ダーウィンが見た光景をたどりながら、生命進化の来し方行く末を考えた。一番最後に地球上に現れた我々ヒトはむろん地球の支配者ではない。最悪最凶の外来種である。なのにあまりに増えすぎ、傍若無人に振る舞っている。本来、生命系の一員であるはずなのに、ヒトと自然の共存の道は険しい。

プロフィール
1959年東京都生まれ。生物学者。京都大学卒業。米国ハーバード大学医学部博士研究員、京都大学助教授などを経て青山学院大学教授、米国ロックフェラー大学客員研究者。サントリー学芸賞を受賞し、80万部を超えるベストセラーとなった『生物と無生物のあいだ』（講談社）や『動的平衡――生命はなぜそこに宿るのか』（木楽舎）など、「生命とは何か」を動的平衡論から問い直した著作を数多く発表。

特集 日本列島の文化の多様性

――佐々木高明の世界からの展望

佐々木高明の見た日本

池谷和信（いけやかずのぶ）
民博 人類文明誌研究部

3月から開幕する企画展では、佐々木高明（元民博館長）が九州でおこなった焼畑の研究を紹介する。彼はこの研究を出発点にして日本列島の文化の多様性・多重構造をとらえた。本特集では、佐々木の研究を手がかりに日本列島におけるあらたな文化像を考える。

企画展 焼畑――佐々木高明の見た五木村、そして世界へ
会期：2022年3月10日（木）～6月7日（火）
場所：本館企画展示場

昨年、北海道内の特急列車に乗っていた際に、アイヌ語の放送を初めて聞いて新鮮であった。二〇二〇年七月に一般公開したウポポイ（民族共生象徴空間）の最寄り駅・白老（しらおい）駅の手前でのことである。日本語、アイヌ語、英語、中国語の順に放送された。これまでわたしはアイヌが先住民族であることを理解はしていたが、ここはアイヌモシリ、アイヌの暮らしてきた土地であることを改めて感じた瞬間であった。

民俗と民族からとらえる

これまで人文学の分野では、日本列島内の文化の多様性が議論されてきた。東日本と西日本、民俗の違いから見たいくつもの日本文化などである。この点で佐々木（ささき）高明（こうめい）の日本のとらえ方は、民俗と民族の両方の視点が兼ね備えられていてユニークである。

彼は、「照葉樹林文化」と「ナラ林文化」を唱えて東アジアのなかの日本を位置づける一方で、北のアイヌ文化、本州を中心とするヤマトの文化、南の琉球文化など、列島の文化の地域性を指摘している。同時に、民俗文化として焼畑習俗や山の神信仰の地域的な違いや共通性にも言及している。

佐々木がこのような枠組みにいたるには、次のような三つの研究の段階があったと考えられる。第一は、一九六〇年前後におこなった熊本県五木村（いつきむら）での焼畑の調査・研究である。彼は、当時、日本で最後といわれた焼畑を対象にして農耕技術や土地利用の調査をおこなった。第二段階では一九七〇年代、西南日本から中国・雲南省、ブータンに拡がる照葉樹林帯において文化の共通性を指摘した植物学者・中尾佐助（なかおさすけ）の仮説を、農耕や習俗などの観点から検証した。そして第三段階では、一九八〇年代以降、海上の道から見た南西諸島と本州のかかわり、アイヌ文化の特徴など、多民族から構成される日本について論じている。

五木村立五木中学校の焼畑体験学習。焼畑の歴史や村の暮らしについて学び、現代の焼畑のあり方を考える（提供：田村誠志、2021年）

多様な文化の鍵

それでは、佐々木高明の研究を手がかりにしてあらたな日本文化像を考えることができないだろうか。日本列島の文化の特性を把握するには、次の三つの視点が欠かせないであろう。

第一は、南北約三〇〇〇キロメートルにわたる日本列島の自然環境の違いに基づく地域性である。北は亜寒帯から南は亜熱帯まで、気候の違いに応じて風土が異なっている。しかも国土の約八割が山地である。山地と平地という枠組みも有効になるであろう。

第二は、地域に応じた時代区分が必要ということだ。今から二万年前、北海道は大陸と陸続きであった。縄文時代には北海道から沖縄本島まで縄文文化という共通性があった。しかしながら弥生や古墳時代になると、水田稲作や古墳を指標として中心と周辺という見方が生まれる。

第三は、列島内の地域文化の動態を描くことは、中世日本が鍵をにぎるということである。例えば一三～一五世紀ごろは、北のアイヌ、中央の鎌倉幕府や室町幕府、南の琉球王朝が互いに関係をもちつつ、独自の展開を見せ、日本列島の文化の多様性が明瞭に存在した時代であるように思える。

五木村での佐々木高明（左）。村人と交流を深めながらフィールド調査をおこなった（1960年、X0398905）

あらたな文化像を求めて

このように佐々木高明の研究から日本列島全体をとらえたとき、列島の文化を「アイヌ」と「日本の文化」というふたつの展示空間にわけた民博の本館展示場の構成にわたしは疑問を感じた。そこで本特集では、地域軸と時間軸を十分に意識して日本列島全体を丸ごととらえなおしてみたい。続く各論考では、先史時代に由来する東アジア・東南アジアの作物の伝播（でんぱ）（四頁）、北海道や北東北などに暮らしてきたアイヌの文化（六頁）、近現代の焼畑の民俗文化（八頁）という三つの側面から新たな文化像を考える。

年	北海道	日本本土	沖縄
前300	縄文時代	弥生時代 稲作文化の展開	先島先史時代 貝塚時代
300	続縄文時代	古墳時代	
600			
800	オホーツク文化の時代	奈良・平安時代	
1000	擦文文化時代 アイヌ文化の形成		原グスク時代
1200			グスク時代 政治的支配者の出現
1400	中世・近世 アイヌの時代	鎌倉・室町時代	琉球王国の時代 全島統一（1429） 海上貿易の発展 島津の侵入（1609） 琉球処分（1879）
1600	松前藩の支配（1604） 山丹交易の盛行		
1800	同化政策による伝統文化の破壊 アイヌ文化振興法の施行（1997）	江戸時代 明治時代 国民国家の形成	沖縄戦 祖国復帰（1972）

日本列島における新しい年表
※佐々木高明がよく用いていた資料をもとに筆者作成

佐々木高明の著作。彼は民博退官ののち、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（現公益財団法人アイヌ民族文化財団）初代理事長も務めた

東アジアの食

佐藤洋一郎
京都府立大学特別専任教授

人類の生存には、エネルギー源である糖質や脂質と、身体を作るたんぱく質が欠かせない。世界各地の人類集団はこの原則によりつつも、異なる食材を組み合わせることでその地域に特有の食文化を生み出した。すなわち食のパッケージである。東アジアから東南アジアにかけての地域では、このパッケージは「米と魚」の形をとってきた。地域によっては米がキビ、アワなどの雑穀になったり、イモになったりもする。あるいは魚といっても種類はさまざまで、特に淡水魚か海の魚かでバリエーションは大きく広がる。この「米と魚」のさまざまなバリエーションを決めているのが、緯度や地形といった要素である。

日本各地の多様なイネの品種（京都府木津川市、京都大学の実験圃場、2020年）

糖質源となった食材

まず糖質源について見てみよう。佐々木高明らは照葉樹林文化とその北に展開するナラ林文化という概念を展開したが、これらの境界を決めた大きな要素が緯度である。ごく大雑把にいえば、イネは照葉樹林文化に、そして雑穀はナラ林文化に育まれた糖質源である。また、照葉樹林帯の南には、ヤマノイモ、サトイモなどを食するイモの文化圏が広がっている。

日本列島でも、米食文化は近世までは東北南部どまりで、それより北の地域では、アワやヒエをまぜた糧（かて）めしが食されていた。米食を東北全体に広げたのは徳川幕府の政策であったが、強引な米食文化の導入はしばしば冷害などによる飢饉（ききん）をもたらすなど、ひずみが大きかった。南九州以南ではサトイモや、近世以降はサツマイモが重要な糖質源として食されてきた。また、瀬戸内から南部の地域では裸麦（はだかむぎ）（オオムギ品種のうち、熟すと穎（えい）「皮」が種子「実」から簡単に剝がれるタイプの品種群）を押しつぶした「押し麦」が米に混ぜて炊かれることが多かった。

野菜類については、古代以降に渡来した多くの野菜は別として、山菜への依存度が高かったことが日本列島の食文化の特徴である。山菜の利用は古代より山岳修験の行者らによるいわば伝統知として後世に伝わったが、修験者が里に下りて広めた里修験（さとしゅげん）の展開により里地での利用が始まったものと見られる。それでも、大規模な生産や流通は現代でも起きず、極めて強い地域性が残されている。

東アジアにおける食のパッケージの諸相　※筆者作成

ニゴロブナのフナズシを漬ける（滋賀県守山市、2006年ごろ）

たんぱく源となった食材

東アジアの動物性たんぱく源の主たるものは魚介や野鳥、それにシカやイノシシなどの野生動物であった。家畜は、ブタやニワトリなどを別として大きく発展することがなかった。特に、ユーラシア西部のような群れをなす大型哺乳動物の家畜化は起こらず、動物資源の大半が天然資源であったことは注目に値する。

魚については内陸部や、島しょ地域でも大きな島の山間部では淡水魚の役割が大きかった。フナなど淡水魚のなれ寿司や魚醤（ぎょしょう）などの発酵食品が保存食として人びとのたんぱく源になっていた。沿岸部では海の魚が大量に食されたが、多くは沿岸に生息する小型の魚や貝類、藻類などであった。海の魚は塩蔵し、あるいは乾燥させて保存食とし、内陸部にも運ばれた。中国の乾燥ナマコやアワビなどは付加価値がつけられて流通した。日本でも、塩サバや塩サケなどの塩蔵品、身欠きニシンや棒鱈（ぼうだら）などの乾（干）物が、内陸部の貴重なたんぱく源となった。

東アジアでは植物性たんぱく質も大きな役割を果たした。特に、日本列島を含む東アジア原産とされるダイズは豆腐や湯葉として、あるいは味噌（みそ）や醤油などの発酵食品として広範囲に使われた。これらが古代末から中世にかけて日本列島にも伝わって、「和食」の原型を形作ったことは特筆に値する。高たんぱくのコムギも、麺類や麩（ふ）として日本にも持ち込まれ、精進料理の発展に大きく貢献した。

麹による発酵食

発酵食品は保存食のひとつとして世界中に見られるが、東アジアでは麹菌（こうじきん）の利用に特徴がある。麹はカビの一種で、湿潤・温暖というこの地域ならではの微生物である。これを味方につけたことで、この地の食は成り立っているといっても過言ではない。

東アジアの食文化を一言で言いあらわせば、「自然に沿う」ということになるだろうか。その土地にある動植物性の食材を強引に育種することなく自然に沿って管理し、また季節（旬）に応じて利用しつつ余ったものは発酵にゆだねて長期間保存する。こうした姿勢のうえに成立したのが日本の「和食」とその文化であり、その意味で日本の食は東・東南アジアの食と兄弟のような関係にあるのだ。

上：沖縄の田芋（那覇市、第一牧志公設市場、2019年）
下：淡水魚の食文化（京都市、錦市場、2020年）

アイヌから見た日本

関根達人（せきねたつひと）
弘前大学教授

藤原守道筆　アイヌ絵《オムシャ図》19世紀前半（筆者所蔵）
手前の漆盆にはオムシャ（アイヌに対する慰労行事）で下賜される貴重な赤布が載せられている

アイヌと琉球

日本（ヤマト）に「中世的世界」が形成された一二世紀ごろ、日本列島の北と南にヤマトとは異なる独自の民族社会が誕生した。アイヌと琉球である。日本が中世から近世、近世から近代へと大きく変化するなか、アイヌ社会や琉球では長きにわたり固有の文化が保持され続けてきた。

国家を形成した琉球とアイヌの部族社会では社会組織はもちろん大きく異なる。しかし、どちらも農業を中心とする中世・近世の日本と違って対外交易への依存度が高く、松前藩や鹿児島藩（薩摩藩）により政治的・経済的に半ば包摂されながらも、江戸幕府の支配が直接およばない「異域」であり続けた。

近代国家の成立により交易型社会が失われた後も、北海道と沖縄では独自の社会と文化が根強く維持され、さまざまな局面で今なおヤマトとの温度差が見られる。ただし沖縄ではウチナーンチュがマジョリティーであるのに対して、近世後期以降、和人の移住が進んだ北海道では現在、アイヌは道民全体の〇・三パーセント以下と圧倒的なマイノリティーである。

下北アイヌが残したアワビの貝塚。トド・アシカ・クジラなどの海獣の骨とともに骨角製の狩猟・漁労具が出土した
（青森県東通村、浜尻屋貝塚、2001年）

文字や貨幣をもたない人びと

和人の目に映ったアイヌ像については、古文書やアイヌ絵などの絵画資料から知ることができる。一方、明治政府による国民化政策以前のアイヌは文字や絵による記録を残さなかったため、彼らの目にシサム（隣人）である和人や日本の文化がどのように映っていたのかは、口承文芸や考古資料から推測するしかない。

中世・近世日本の経済は、津々浦々を結ぶ海運による物資の広域流通と貨幣経済の発達によって特徴づけられる。アイヌや琉球の対外交易の最大の相手は日本であり、交易の規模は時代とともに拡大した。アイヌも古くは農耕や金属加工をおこなっていたが、対和人交易品を生み出すため次第に狩猟・漁労に専従するようになった。そして狩猟・漁労などの生業（せいぎょう）や儀礼など、生活に必要な物資の多くを日本製品に依拠するようになったことで、アイヌ社会は日本経済圏に組み込まれ、和人による経済的支配を受けるようになった。

日本とアイヌ間の交易では、日本からは鉄製品・漆器・布・米・酒・タバコ・煙管（きせる）など、アイヌからはおもにエゾシカ・クマなどの陸獣やアザラシ・ラッコなど海獣の毛皮、サケ・ニシン・アワビ・コンブなどの海産物が取引されたが、遠隔地交易に便利なはずの貨幣は使われず、アイヌ社会で貨幣が流通することはなかった。アイヌは手に入れた中国や日本の銭を貨幣として用いるのではなく、首飾り（タマサイ）などアクセサリーのパーツに転用した。アイヌ社会には多数の日本製品が見られるが、彼らは自らの価値観にしたがい取捨選択し、受容する場合でも、自らの文化的脈絡のなかで独自の使い方をしたのである。

アイヌの価値観

中世の日本人を魅了したお茶と仏教は、日本が中国を中心とする東アジア的世界の一員であることを物語るが、それらがアイヌ社会で受容されることはなかった。中世から日本で盛んに使われはじめた陶磁器も彼らの生活用具にはならなかった。アイヌの物質文化には、海獣類の骨や牙を使った道具や装身具・ビーズなど北太平洋の先住民族に共通するモノと、太刀（たち）・玉（ぎょく）・鏡・漆器といった古代日本の価値観に則（のっと）ったモノとが「同居」している。

和鏡をシトキ（飾り板）に使ったタマサイ。江戸中期に作られた藤原光政銘の柄鏡の柄を切断のうえ、2箇所に穿孔している
（市立函館博物館所蔵、児玉コレクション 691）

銭が使われた樺太アイヌのタマサイ（部分）。中国・唐の開元通宝（621年初鋳）から幕末の文久永宝（1863年初鋳）まで、中国銭20枚、日本銭39枚、朝鮮銭1枚が使われている（市立函館博物館所蔵、児玉コレクション KH13-095）

「樽前b火山灰」（1667年降下）の直下で見つかったエゾシカの送り場。頭骨はすべて下顎骨が外され、雌雄にわけ積み重ねられていた。近くではヌサ（祭壇）跡と思われる柱穴列も発見されている（北海道厚真町、ニタップナイ遺跡、2007年）

アイヌは縄文人と違って自給自足の生活をしていたわけではない。しかし、交易のためとはいえ、狩猟や採集に生業の基盤を置く限り、自然に対する畏敬の念を失うことはなかった。だからこそ、シサム＝和人には希薄となる一方のモノに対する魂送り（たまおく）の思想が保たれたのであろう。

焼畑から見た日本

米家泰作
京都大学教授

佐々木高明の『稲作以前』と『日本の焼畑――その地域的比較研究』が刊行されたのは、もう半世紀も前のことである。大学生のときに両書に出会ったわたしは、焼畑の歴史に興味をもち、卒業論文のテーマとした。ただし、わたしが調査したのは、焼畑がすでに消滅していた紀伊山地であった。

佐々木は、面積や農家が多いという点で八つの山地（北上、奥羽・出羽、上越・頸城、飛濃越［飛騨高地・両白山地］、山陰、四国、赤石・丹沢、九州）を「焼畑卓越地域」とよんだ。わたしがそのなかからフィールドを選ばなかったのは、出身地に近くてなじみがあり、史料の目星がついていたからである。

「進化」する焼畑

紀伊山地の北部、紀の川上流の山村の古文書からは、江戸時代に焼畑でチャノキやコウゾが栽培され、それがスギの植栽へと進んだことが見えてきた。当地の林業は明治以後、「吉野林業」の名で知られるようになるが、それは焼畑を消滅させた原因というよりは、その進化形態であるようにも見える。焼畑も林業も、人が意図してさまざまな植物を山にもち込み、その生長に応じて収穫・伐採することで、遷移を繰りかえす営みだからである。

しかし佐々木にとっては、主食となる穀物を栽培する焼畑こそが、より焼畑らしい焼畑であったにちがいない。佐々木は林業と共存する焼畑を「林業前作農業型」とよび、焼畑の「一つの進化の方向」だとは述べたが、それは卓越地域の指標にはならなかった。

紀の川上流の山村。大滝ダム建設時の地滑りにともない集落が移転したため、現在この光景は見られない（奈良県川上村白屋、1992年）

島嶼と低地の焼畑

佐々木高明の『日本の焼畑』の重要な出発点となったのが、一九五〇年の世界農業センサスに記録された焼畑面積・農家数である。佐々木が市郡単位で描いた分布図は、さまざまな文献に再掲されており、焼畑研究者にはよく知られている。

図 1：1950年の焼畑・切替畑を営む農家数
※ 1950年世界農業センサスと国土数値情報より筆者作成

佐々木は卓越地域を強調するために、焼畑面積五町未満の市郡を捨象した。しかし、すべての市町村の焼畑面積・農家数を図示してみると、日本の焼畑の違う側面が見えてくる。焼畑農家の分布図（図1）は佐々木のいう焼畑卓越地域をよくあらわしているが、伊豆諸島や隠岐、対馬、甑島、屋久島のように、島嶼の農家も多かった。焼畑面積を見れば（図2）、特定の山村地域に集中しているというよりも、都市近郊の低地を含め、広く散在していたことがわかる。これは、焼畑とされた統計値に「切替畑」が含まれていたことが関係している。

センサスの定義によれば、切替畑とは新開墾地や肥沃でない土地でおこなわれていた、休閑を伴う耕地であるが、統計の項目は焼畑とひとくくりになっている。北海道十勝地方の大きな円は新開墾地の可能性が高い。しかし、そうでない例については、焼畑と切替畑を区別するのは難しい。歴史的には、焼畑も切替畑も、焼畑をあらわす語彙の一例にすぎなかったからである。

草原の焼畑

一八世紀末に農政学者・大石久敬が著した『地方凡例録』は、切替畑だけでなく、薙畑や奥羽の鹿野畑、甲斐の苅生畑といった方言を列挙して、呼称や農法に違いはあるものの、これらもすべて焼畑だと述べている。ただし、休閑期間が五年から一〇年ある苅生畑は、ふつうの焼畑ではなく、特殊な焼畑だという。

図 2：1950年の焼畑・切替畑の面積
※ 1950年世界農業センサスと国土数値情報より筆者作成

同書がいうふつうの焼畑とは、一年間の耕作期間と一、二年の休閑期間を繰りかえすという、ローテーションが速い焼畑であった。この場合、休閑地に森林が再生することはなく、むしろ草原で営まれる焼畑だったといえる。このような耕作期間も休閑期間も短い焼畑は、よく注意すれば近世の史料に散見される。

佐々木が『日本の焼畑』で扱った焼畑は、例えば三年の耕作期間と一五年の休閑期間をもつような、ゆっくりとしたローテーションをもつ森林の焼畑である。しかしそれは、江戸時代においては、奥地の山村で発達した特殊な焼畑として理解されていた。より短期的な草原の焼畑こそが、人びとがよく知る焼畑であった可能性が高い。一九五〇年のセンサスから佐々木が捨象した地域にも、そのような焼畑が含まれていたのかもしれない。

焼畑の環境史へ

日本文化の源流に目を向けていた佐々木高明にとっては、より本格的な森林の焼畑にこそ、文化の核心にかかわる何かがあったのだろう。ただし、佐々木の文化論的な議論からは、「進化」した焼畑や、草原の焼畑の姿は、こぼれ落ちてしまったように見える。しかし、そうした焼畑もまた、人為的な植物の景観を生みだしてきたわけであり、日本の環境史を考えるうえで欠かせない生業である。このことを考えるためのヒントを求めて、わたしは今改めて、『日本の焼畑』を丹念に読み返している。

みんぱく回遊

日系アメリカ人の足跡を探る

丹羽典生（にわのりお）
民博グローバル現象研究部

第二次世界大戦中の一九四二年二月一九日アメリカの大統領フランクリン・ルーズベルトは、大統領令九〇六六号に署名した。これをもってアメリカの敵性国人は、強制収容所での生活を余儀なくされることとなった。そのなかにはカリフォルニア州などの西海岸にいた日系人が含まれていた。今年二月で、この大統領令が発令されて八〇年を迎える。そこで今回は、本館展示場にあるアメリカの日系人関係の資料を探訪してみたい。

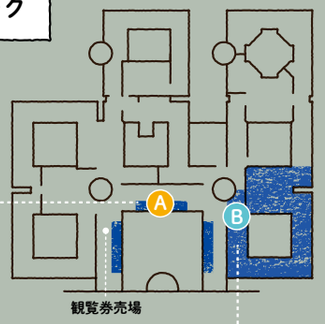
ということで展示場を散策してみても、じつはそれほど関連資料は見つからない。考えてみれば当たり前のことで、通文化展示のコーナーを除き、地域割となっている本館展示では、移民資料はなかなか居場所を見いだしがたいのだ。もちろん近年のグローバル化や多文化化の状況は、どこの地域展示でも認識されており、各地の移民状況や日本とのかかわりを示す展示品を目にすることができる。また、二〇〇一年には、全米日系人博物館巡回展「弁当からミックスプレートへ」がみんぱくでも開催されている。しかし、現在の展示場から日系アメリカ人資料を探してもなかなか見つからないのだ。

日本の文化展示場の移民情報

そうしたなか、日系人に関する何らかの情報が見つかるのは、まず、日本の文化展示の最後にある「多みんぞくニホン」セクションである。日本に暮らす移民に注目して設置されたコーナー「移民と日本」では、さまざまな国や地域から来た移民が、いつ、どのようにして日本を生活の場としたのか、またどのような歴史的流れのなかで来日したのかが、豊富な写真資料とともに紹介されている。

日系人については、セクションの入口に掲示されている年表のなかに情報がある。コーナーの性質上、基本的には来日した移民にかかわる事項が記載されているなか、日本人移民についても言及があるのだ。例えば、一八九九年には「アメリカ大陸への日本人出移民開始」、一九二四年には「米国への日本人移民規制」とあり、日系人のなかでもアメリカとのかかわりについての事項が見られる。

Ⓑ「多みんぞくニホン」セクションの「移民と日本」のコーナー

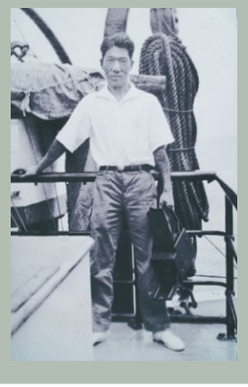


日系人収容所体験を見る

日系人の経験として看過できない資料がほかにもある。ただし展示場のなかの標本資料ではなく、映像音響資料だ。本館展示のインフォメーション・ゾーンにあるビデオテークブースで「朝枝利男（あさえだとしお）コレクション」（番組番号六〇〇一）を検索すれば、それらを閲覧できる。番組を選択し、目次の一番下にある「日系人強制収容所」を見ていただきたい。日系人の体験を絵画資料から垣間見ることができる。

朝枝利男は、戦前のアメリカで活躍した写真家である。カリフォルニアの富豪の企画した探検に参加することで、一九三〇年代の太平洋社会をひろく航海し、当時の自然環境、社会や文化のすがたをフィルムに焼き付けている。太平洋戦争が始まると、彼のアメリカでの生活は急激に様変わりをする。探検はおこなわれなくなり、彼は妻とともに日系人の収容所での生活を余儀なくされる。

上：朝枝の過ごした棟のある風景（1942年）
左：朝枝が過ごした収容所の部屋（1942年）
（いずれもタンフォラン集合センターにて制作。本館所蔵）



南太平洋旅行中の朝枝利男。ゼーングレー氏所有のヨット、フィッシャーマンII世号にて
（1931年、本館 朝枝利男コレクション、X0075964）

Ⓐ 映像音響資料「朝枝利男コレクション」の検索画面。写真や水彩画をクリックすると、詳細情報が表示される

このビデオテーク番組に収められているのは、朝枝利男がカリフォルニア州のタンフォランとユタ州のトパーズで過ごした際に描いた水彩画である。特段、芸術の修練を積んだわけでもない日系人が、収容所での滞在中に残した工芸作品などを、「尊厳の芸術」とよぶ人もいる。祖国と居住地のはざまで引き裂かれた彼らの苦渋の経験が刻み込まれた作品群という意味である。朝枝の一連の作品もそうしたジャンルにつらなるものといえよう。彼の残した水彩画を鑑賞することで、日系人としての朝枝がどのような経験をしたのか、つつましくも独特な世界を、まさに朝枝の肩越しに瞥見（べつけん）できる。日系人収容八〇年にあたる本年は、閲覧するにふさわしい機会といえる。

INFORMATION みんぱく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event

特別展

日本・モンゴル外交関係樹立50周年記念特別展
「邂逅する写真たち ――モンゴルの100年前と今」

モンゴルの100年の変貌を写真で辿る体験型の「写真展」です。大草原と遊牧民とは異なるモンゴルに出逢えます。

会期　3月17日(木)～5月31日(火)
会場　特別展示館

■**関連イベント**
みんぱく映画会
「ヒップホップから見た現代モンゴル社会 ――映画『モンゴリアン・ブリング』から考える」

モンゴルのヒップホップをテーマにしたドキュメンタリー映画を上映すると同時に監督や出演者が国境を越えた座談会をおこないます。

日時　3月21日(月・祝)13時30分～16時20分(13時開場)
参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
上映作品「モンゴリアン・ブリング」(日本語字幕あり)、2012年
座談会
ベンジ・ビンクス(上映作品監督、オンライン登壇)
ジェニー(コッパー、オンライン登壇)
ハンガー(ラッパー)
川瀬慈(本館 准教授)
司会　島村一平(本館 准教授)
※要事前申込(会場参加は本人を含む2名まで)、先着順、参加無料(会場参加は要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会電話先行受付
2月14日(月)～2月18日(金)
定員30名

【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
2月21日(月)～3月11日(金)

企画展

「焼畑 ――佐々木高明の見た五木村、そして世界へ」

日本や世界の焼畑を事例にして、現代社会と焼畑とのかかわり、日本文化のなかでの焼畑のもつ意義について紹介します。

会期　3月10日(木)～6月7日(火)
会場　本館企画展示場

みんぱく映像民族誌シアター

「インドの染色職人カトリー ――カッチ地方の絞り染めと更紗」

本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。

日時　2月23日(水・祝)
13時30分～16時(13時開場)
参加形式
①会場参加　シアターセブン(大阪・十三)(定員26名)
②オンライン(ライブ配信)
(定員100名)
※要事前申込(会場参加は本人を含む2名まで)、先着順、参加無料
解説　上羽陽子(本館 准教授)
金谷美和(国際ファッション専門職大学 准教授)
司会　南真木人(本館 教授)

【申込期間】
■一般受付
2月18日(金)まで
※友の会先行受付は終了しました。

【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
2月21日(月)～3月11日(金)

「Ａｉｎｕ―ひと」

昭和初期に生まれ、時代の過渡期を生きた四人の古老。その生き様とアイヌ文化伝承の今を伝えるドキュメンタリーです。

日時　3月26日(土)13時30分～16時
(13時開場)
参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)
(定員300名)
解説　溝口尚美(上映作品監督)
司会　齋藤玲子(本館 准教授)
※要事前申込(会場参加は本人を含む2名まで)、先着順、参加無料(会場参加は要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会電話先行受付
2月18日(金)～2月25日(金)
定員30名

【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
2月28日(月)～3月18日(金)

研究公演

「絆 ――人をつなぐ太鼓」

和太鼓「絆」による演奏を通じて、異なる背景をもつ人びとが、違いを違いとして認め合い、楽しみながら学び合う社会を作る可能性をさぐります。

日時　3月20日(日)14時～16時30分
(13時30分開場)
参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員130名)
②オンライン(ライブ配信)
(定員300名)
出演　和太鼓「絆」
解説　寺田吉孝(本館 名誉教授)
司会　福岡正太(本館 教授)
※要事前申込(会場参加は本人を含む2名まで)、先着順、参加無料(会場参加は要展示観覧券)

【申込期間】
■友の会電話先行受付
2月14日(月)～2月18日(金)
定員25名

【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
2月21日(月)～3月11日(金)

公開講演会

「イメージの脈動にふれる」

イメージは、人の制御を超えて生成、変化し、世界を形づくります。また、時空を超えて脈打ち、さまざまな媒体をとおして顕現し増殖します。人間の感覚、あるいは感覚を超えて生成されるイメージの主体性をとらえ、知や学問のありかたを考えます。

日時　3月25日(金)18時30分～21時
(17時30分開場)
会場　オーバルホール
(大阪市北区梅田)
定員　180名
講演　中沢新一(思想家、人類学者)
報告　川瀬慈(本館 准教授)
末森薫(本館 助教)
パネルディスカッション
中沢新一×川瀬慈×末森薫
司会　平野智佳子(本館 助教)
主催　国立民族学博物館
毎日新聞社

※要事前申込、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。
※手話通訳あり

お問い合わせ先
本館 研究協力課 研究協力係
06―6878―8209

国際シンポジウム

「学際研究とフォーラム型情報ミュージアム」

文化遺産、芸能、博物学、アーカイブズを研究テーマとするプロジェクトを紹介し、調査・研究の有力な手段としてのフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの意義について考えてみたいと思います。

日時　3月6日(日)10時～17時25分
(9時30分開場)
会場　オンライン開催
講演　八木百合子(本館 助教)
丹羽典生(本館 准教授)
南真木人(本館 教授)
福岡正太(本館 教授)
コメンテーター
栗田博之
(東京外国語大学 名誉教授)
ユウ・ペイリン
(ボイジー州立大学 特任准教授)
総合司会　野林厚志(本館 教授)
※要事前申込、参加無料
左記URLからお申し込みください。
https://forms.gle/kgMtfVsBqemAk5468
※状況によっては講演者、コメンテーターを変更する場合がございます。

【申込期間】
■一般受付
2月28日(月)まで

みんぱくゼミナール

参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
・要事前申込、先着順、参加無料
・当日参加受付あり(会場参加のみ、定員30名)

第518回
2月19日(土) 13時30分～15時(13時開場)
遙かなる山々
――アンデス文明探求40年の軌跡
講師　関雄二(本館 教授)

【申込期間】
■一般受付　2月16日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第519回
3月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
焼畑は環境破壊か
――佐々木高明の研究とその後
講師　佐藤廉也(大阪大学 教授)
米家泰作(京都大学 教授)
池谷和信(本館 教授)

国立民族学博物館第2代館長・佐々木高明は焼畑研究の第一人者です。本ゼミナールでは、日本や世界の焼畑の歴史と現状をわかりやすく紹介しながら、現代社会のなかでの焼畑の意義について考えます。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
2月14日(月)～2月18日(金)
定員30名、会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
2月21日(月)～3月16日(水)
※会場参加のみの開催です。オンライン(ライブ配信)はございません。

みんぱくウィークエンド・サロン ―― 研究者と話そう

会場　第5セミナー室(定員42名)
※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)、14時より整理券配布
※各回、開始30分前に開場

本館の研究者が「みんぱくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。

2月13日(日) 14時30分～15時
野生性と人類の論理
話者　卯田宗平(本館 准教授)

2月27日(日) 14時30分～15時
海を渡った一族
――沖縄の座間味島をめぐる移動史
話者　藤本透子(本館 准教授)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話　06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

友の会講演会

受付フォームは友の会ホームページ内にあります。会場参加のみ、会員以外の方もご参加いただけます。
※会員：無料(会員証提示)
一般：資料代500円
参加形式
①本館第5セミナー室(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
※要事前申込、先着順

第521回　2月5日(土)13時30分～15時
記憶が生まれる、記憶をつむぐ
――南米アンデス文明の文化遺産保護の道のり
講師　関雄二(本館 教授)
講演者は、過去40年以上にわたってアンデス文明の形成過程を追うかたわら、文化遺産の保護を地域住民とともに実施してきました。本講演では、その足跡を辿るとともに、地域住民が抱く文化遺産に関する記憶に注目し、文化遺産保護の共創プロジェクトを実現する方法を考えます。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/521tomo/

第522回　3月5日(土)13時30分～15時
病の語りにさぐる
――産後風と韓国女性の生活
講師　諸昭喜(本館 助教)
韓国には、産後に適切なケアを受けることができなかったときに発症する「産後風(サヌプン)」とよばれる病があります。これはどんな病気で、なぜ人びとに広く知られているのか、なぜ女性たちは共通した思いをもっているのかなどを、病についての語りから紹介します。また、病をとおして韓国社会の女性が経験してきた生活についても考えます。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/522tomo/

みんぱく友の会オンラインレクチャー

みんぱくの研究者によるミニレクチャー動画を友の会ホームページ内で公開しています。最新作では池谷和信先生が、焼畑についてお話しします。

公開ページ
https://www.senri-f.or.jp/category/events/online/

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話　06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

コロナ禍の韓国における「安心」の感覚

諸（チェ）昭喜（ソヒ）
民博 グローバル現象研究部

日本に住むようになっても、韓国の携帯電話番号はもち続けていた。昨年からその番号に詐欺電話が多くかかってくるようになり、わたしは大学入学時に初めて携帯電話をもって以来、二〇年ぶりに韓国の電話番号を解約した。

公共交通機関以外の手段で地方に移動する方法を説明する空港内の案内所。スタッフは全身防護服を着用している

二〇二一年夏、コロナ禍の韓国で

七月、韓国に入国するときには、日本の電話番号が入ったスマホだけで問題はなかった。「自宅隔離者安全保護」アプリがダウンロードされているか、保護者との通話が可能かさえ確認が取れれば入国することができた。自宅待機中、わたしたち家族の体調を確認するために、保健所から毎日連絡がもらえるのはありがたいことだったが、自宅待機用のアプリはわたしにとって、足かせのように感じられた。アプリは、スマホの位置情報でもち主の居場所を追跡しており、指定された場所から少し離れるだけでも画面表示と警告音で厳しく注意される。そのため、外出はおろか、玄関にさえも近づくことができなかった。しかも、昼間は二時間程度スマホを触らないだけで警告音が鳴るので、風呂に入るときでも手放せず、昼寝さえできなかった。自宅待機を始めてから一四日後、もうこりごりのスマホから解放されて、わたしはようやく外出ができるようになり、さっそく友だちと会う約束をした。待ち合わせの場所であるカフェに入るには手順があった。マスクの着用と手の消毒、体温測定。ここまでは日本と同じで慣れている。でもスマホで何かをしなくてはならない。まごまごしていると、店員がQRコードを提示するよう声をかけてくれた。「今はスマホを携帯していませんか」と答えると、店員から手書きで連絡先を書くように言われた。「わたしは韓国の携帯電話番号をもっていないのですが？」と伝えると、店員は困った顔でわたしを見つめた。押し問答をしているところにちょうどやってきた友人の仲裁によって、ようやくわたしはカフェに入ることができた。

QRコードの読み取り画面を撮影する筆者
（写真はいずれも2021年に撮影）

電話番号をもたずに帰国してみました

電子出入名簿

このQRコードの正式名称は「電子出入名簿」である。韓国ではコロナウイルスの流行初期から感染者の位置把握に重点をおいている。七月時点、韓国は感染症危機レベルが「深刻」であったので、多人数が出入りする感染の危険性が高い場所、または、施設を利用するときには記名が義務になっていた。手書きの名簿は、偽名の使用や個人情報の流出が問題視されるほか、ペンや紙から感染する可能性もあるので、QRコードで出入りを記録する方法が二〇二〇年六月から全国的に導入された。スマホのもち主が本人認証のできるQRコードを提示し、施設管理者が読み取るというしくみだ。施設を利用するたびに出入名簿のQRコードを提示しなくてはならない。わたしは自宅以外のほぼすべての場所（図書館、病院、カフェ、レストラン、ショッピングモールなど）で、同様のトラブルに直面し、結局、数日後、自分名義の携帯番号をもつことにした。

上：病院の入口。サーモグラフィーカメラで体温が測定され、同時にQRコードが確認されないとドアは開かない
右下：一定時間スマホに触らないと、警告音とともに位置確認をうながす画面表示が出る
左下：大学の入口に設置されたサーモグラフィーカメラ。右手には手順を示す掲示板

携帯番号いまどき新事情

韓国で携帯電話番号は、もはや単なる連絡先ではない。調査によると、成人の携帯電話保有率は一〇〇パーセントであり、そのうちスマホ使用者は九五パーセントに当たる。朝鮮戦争以来、住民を確認するためによく使われていた「住民登録番号」は二〇一四年から収集や使用が厳しく制限され、代わりにその役割を担ったのが携帯電話番号である。常時は、本人確認はあまり必要とされないが、コロナ禍になって以来、個人の健康、移動ルート、位置情報はもはやプライバシーの領域にとどまらず、防疫政策上、国にとって必要なデータとなっている。韓国の「K防疫モデル」は検査・確定（Test）→疫学調査・追跡（Trace）→隔離・治療（Treat）という3Tを中心としている。つまり、いつ、どこにいたのか、という情報を提供することは、感染者と濃厚接触者を把握し、隔離するという国の政策を遂行するために、国民に課せられた義務となっている。携帯電話番号をもたないわたしは本人確認がすぐにできない不審者で、追跡ができないからどこにも入れない、韓国人でありながら異邦人になってしまった。

カフェで会った友だちは、人びとの位置を正確に把握するのが重要だと言った。このカフェにいる誰かが感染者なら、同じ時間、同じ空間にいた人やまたその接触者まで全員のPCR検査をして隔離させてこそ、ウイルスの拡大を防ぐことができるので、QRコードと防犯カメラがある方が「安心」なのだと考えていた。その「安心」ということばに、わたしは釈然としないものを感じた。

コロナ禍の韓国の街の様子。みな外出を控えているので閑散としている

籠再発見

浦 蓉子
奈良文化財研究所研究員

日本各地の遺跡から出土する、長らく用途不明であった謎の木製品「四方転びの箱」。2016年、奈良県橿原市の瀬田遺跡から出土した遺物によってその用途が判明した。現在、日本では使われなくなってしまった脚台付きの編み籠のかつての姿を考古学は解き明かす。

謎の木製品「四方転びの箱」とは？

日本では、弥生時代の終わりごろから古墳時代にかけての遺跡から、角錐台の形状をもつ箱形木製品が出土している。これらは、箱の側板が四方向に「転び」＝傾きをもつことから「四方転びの箱」とよばれていた。全国から五〇例ほどが出土しているこの遺物は、箱とよばれているものの底板がなく、長らく用途不明であった。台形の箱状の上部には、植物質の紐による緊縛の痕跡が残されており、わたしは、土のなかで腐食してしまうような何かが結びつけられていたと考えていた。また、四方転びの箱の上部はいずれも正方形に近い形をしており、ある程度の規格があることに気づいていたものの、その使い方を断定するには至っていなかった。

ところが二〇一六年、奈良県橿原市の瀬田遺跡から出土した編み籠によって、その用途が判明した。

めずらしい編み籠の発見

その籠は、底部に木でできた脚台が装着された状態で発見された。弥生時代後期末～終末期（三世紀前半ごろ）の編み籠で、円形周溝墓の東周溝内の溝底に据え置かれたかのように出土したという。

編み籠などの植物質でできた遺物は土中で腐りやすく、脆い。そのため、みつかった編み籠は補強され、土ごと取り上げられた。そして室内で丁寧な洗浄がおこなわれ、その全体像が姿をあらわした。編み籠はその編み方まで観察でき、底部、体部、そして口縁部とで編み方が細かく使いわけられていることがわかった。

この編み籠の底部に括りつけられていた木製品は、角錐台に復元でき、その板の長辺部分には大きく半円状の刳りこみが施されていた。わたしは、この出土した編み籠をみた瞬間に、四方転びの箱が編み籠の底部に装着する脚台であったことを理解した。これまでに出土していた四方転びの箱には、刳りこみがあるものはほとんどみられなかったが、板と板との結合方法や、板の上部に残された緊縛の痕跡と、出土した編み籠にみられる結合紐の痕跡がぴったり一致し、そしてその大きさがこれまで見つかっている四方転びの箱の範疇に収まった。編み籠の脚台であると解明できたのは、これまでに積み重ねてきた四方転びの箱の詳細な分析があったからである。

奈良県奈良市の平城宮下層遺跡から出土した「四方転びの箱」（1983年出土、所蔵：奈良文化財研究所）

奈良県橿原市の瀬田遺跡から出土した脚台付き編み籠（2016年出土、所蔵：奈良文化財研究所）

籠は、復元すると底部が九センチメートル四方、高さは約一七センチメートルで、口縁部の直径は約四〇センチメートルに復元できる。脚台にはブナ科のツブラジイ、脚台と編み籠を結びつける植物質の紐にはつる植物のツヅラフジが用いられていた。そして籠本体には、割り裂いて細くしたタケ亜科の植物が用いられた。籠のなかの土からは、大型植物遺体が出土したが、残念ながら内容物を想定できるほどではなかった。

世界に目を向けると

国立民族学博物館の所蔵資料のなかにも、籠の底部に「脚台」がついている籠がみられる。これらはフィリピン、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスなど東南アジアの国々で収集されている。いずれもここ半世紀のあいだの収集品である。用途をみると、「飯籠」、「運搬用籠」、「儀礼用籠」、「背負い籠」、「豆保存用籠」、「米入れ」、「収納用籠」など、食品入れや保存・収納など、さまざまであることがわかる。籠の底面を地面から離すことで、地面の湿気を直接受けないようにしているのだろう。瀬田遺跡の籠は、出土状態からは儀礼用であることを思わせるが、保管用、もしくは食品入れとして用いられていたのかもしれない。

弥生時代の終わりごろから古墳時代にかけて使われていたことが明らかとなった脚台付きの編み籠。ただ、これらの脚台付きの編み籠は、現在の日本の民具や民芸品にはほとんどみられない。しかし、日本各地で脚台付きの編み籠が用いられていたことを、考古学は解き明かした。今後も忘れられた道具の「再発見」が各地でなされるだろう。

運搬用籠（ラオス、H0028979、幅36cm×高さ63cm×奥行36cm）

運搬用籠（ベトナム、H0161103、幅45cm×高さ82cm×奥行41cm）

飯籠（インドネシア、H0010257、幅35cm×高さ28cm×奥行35cm）

シネ倶楽部M

そしてドラマは続く、問題も続く

菅瀬晶子（すがせ あきこ）
民博 超域フィールド科学研究部

本コーナーで、パレスチナ映画を紹介するのは二度目になる。二〇二〇年四月号で「ガザの美容室」を取り上げた際、わたしはパレスチナ映画に今後必要なのは、普遍性ある物語としてパレスチナの現状を描くことだと述べた。わたしの知る限り、この点をクリアしているのは「ガザの美容室」と、ヒップホップを自己表現の手段として獲得し、境界を越えてゆく若者たちを追った「自由と壁とヒップホップ」（二〇〇八年）のみである。

今回取り上げる「テルアビブ・オン・ファイア」は、一見すると既存のほとんどの作品同様、パレスチナ・イスラエルという環境に依拠した、閉じた物語である。しかしながら、その特殊な舞台設定を最大限利用し、爆発的なエネルギーをもつブラックユーモアで、事情を知らない観客をも巻き込んでゆく快作に仕上がっている。

ニートの受難と逆襲

舞台は二〇一〇年代後半の東エルサレム、つまり一九六七年の第三次中東戦争以降、イスラエルの支配下に入ったアラブ側のエルサレムと、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区の中心都市ラーマッラー。東エルサレム出身でイスラエル市民権をもつ、覇気のないニートの青年サラームが、ラーマッラーにあるテレビドラマ制作会社でヘブライ語監修のアルバイトをはじめるところから、物語は幕を開ける。撮影されているのは、現在大ヒット中のメロドラマ「テルアビブ・オン・ファイア」。第三次中東戦争前夜のテルアビブで、要人暗殺の使命を帯びたパレスチナ人女性工作員とその恋人、そしてターゲットであるイスラエル軍の将軍の、波瀾万丈（はらんばんじょう）の三角関係が繰り広げられる。

サラームは初日から、ヘブライ語の語法をめぐって脚本家ともめる。魅力的な女性を「爆発的」と表現することに、異議を唱えたのだ。ところが彼の指摘は的外れで、これはヘブライ語の日常会話でよく使われる表現である。二言語話者であるはずのサラームが、巷（ちまた）で頻用される表現に疎かったのは、どうやら人間に関心がないためであるらしい。その彼が、人間を描く脚本にかかわるという皮肉。

ラーマッラーの職場に通うため、サラームは毎日イスラエル軍の検問を通らなければならない。ところがちょっとした虚栄心から「テルアビブ〜」の脚本家だと嘘（うそ）をついたために、彼は検問の司令官アッシに目をつけられてしまう。アッシの妻はドラマの大ファンで、彼自身も内容をくさしながら、じつは筋が気になって仕方がない。アッシはドラマの続きを教えろとせがむばかりか、あろうことかサラームから身分証を取り上げ、自分の思いどおりに脚本を書かせようと脅迫する始末。折しも降板した脚本家の代役に抜擢（ばってき）されてしまったサラームは、プロデューサーである叔父や主演女優、アッシからの要求が砲弾のように降り注ぐなか、すべてをまるく収めるため、最終回に向けて文字どおり命がけで脚本を書くはめになる。

平和の暗喩

イスラエル軍人でありながら、パレスチナのメロドラマに夢中なアッシ。政治的にも文化的にも、もはや深くかかわらずにはいられないイスラエルとパレスチナの姿が垣間見える。しかしながら、優位に立つのはあくまで圧倒的強者であるイスラエルである。アッシが執拗（しつよう）に求めるハッピーエンド、つまりパレスチナ人女性工作員とイスラエルの将軍の結婚はこの関係性の縮図であり、中東における結婚生活同様、イスラエルがパレスチナを力で支配することこそが、イスラエルの望む平和であることが暗示される。ただしそのフィクションの創造主として君臨するアッシは、無知な弱者に知恵を授け、寛大にふるまう中東の理想的男性像たらんとしているようだが、じつはその裏の顔である、無自覚な暴力的独裁者としての姿が強調されたカリカチュアでしかない。

対するサラームは決してアッシに抵抗せず、翻弄されながらも巧妙に利用し、綱渡りを続けてゆく。中盤まで彼を支配している覇気のなさは、口先ばかりで実行の伴わない旧世代のパレスチナ人に対する、若い世代の失望を体現している。アラビア語で平和を意味する名をもつ、優柔不断で流されやすいこの主人公は、パレスチナとイスラエルの平和の擬人化とも解釈できる。現状を白紙に戻し、平和のためのあらたな道を模索したいという若い世代の願いが、映画終盤がむしゃらにキーボードを打つサラームを突き動かしているかのようだ。

サラームの立ち回りが功を奏し、テレビドラマ「テルアビブ・オン・ファイア」は、誰もが予測しえなかった衝撃的、いや笑撃的な最終回を迎える。しかし根本的な問題は解決されぬまま、火種があちこちにくすぶっていることをほのめかし、映画も終わる。「続編決定！」の煽（あお）り文句とともに、ドラマは続き、パレスチナ・イスラエル問題も続く。まさにオン・ファイア、尻に火がついた状態で。

ヨルダン川西岸地区の中心都市、ラーマッラー。キリスト教徒も多く、開放的な雰囲気が漂う（2014年）

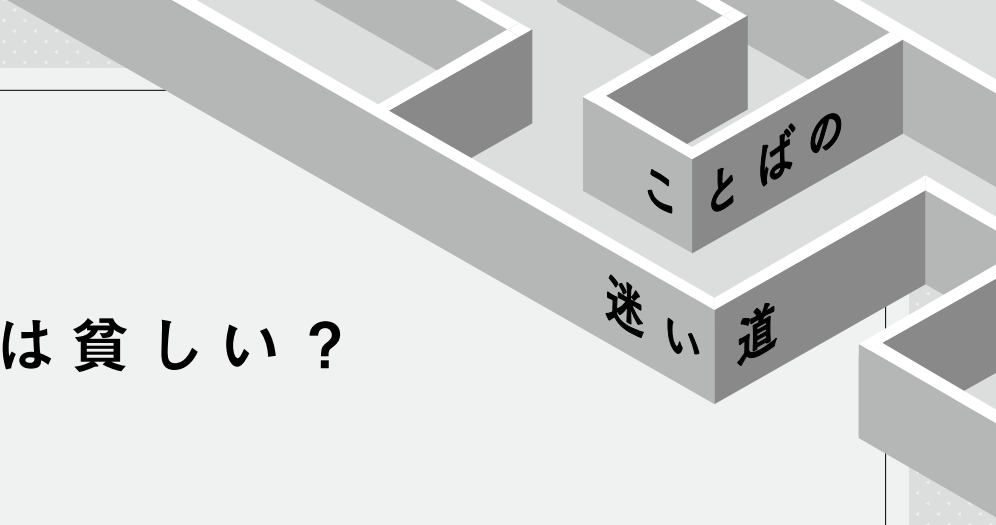
「文化の盗用」の事例としてたびたび議論されるひよこ豆のディップ、ホンモス。東地中海を代表する料理のひとつだが、本作でも重要な小道具として登場する（ヨルダン川西岸地区、2013年）

エルサレムとラーマッラーのあいだにある、カランディヤ検問。過去のパレスチナ映画でも数多く登場する（ヨルダン川西岸地区、2014年）

「テルアビブ・オン・ファイア」

原題：תל אביב על האש
2018年／イスラエル、ルクセンブルク、フランス、ベルギー／アラビア語、ヘブライ語／97分／DVDあり
監督：サメフ・ゾアビ
出演：カイス・ナシェフ、ルブナ・アザバル、ヤニブ・ビトンほか

© Samsa Film - TS Productions - Lama Films - Films From There - Artémis Productions C623



市場の
ことばは貧しい？

中川 理（なかがわ おさむ）
民博 グローバル現象研究部

南フランスのある青果市場では、まだ日も昇らない朝早くから、取引のことばが交わされる。この市場では毎朝、多くの生産者と仲買業者が直接会ってズッキーニ、メロン、リンゴといった生産物をトン単位で取引している。彼らのことばは、とても短く端的だ。仲買業者「いくらだ？」、生産者「85」、仲買業者「高すぎる、80」、生産者「相場は上がってる、85」。彼らがぶっきらぼうに口に出す数字は、1キロあたりの値段をサンチーム（100サンチーム＝1ユーロ）であらわしている。生産者の主張する値段が気に入らなければ、仲買業者は隣の生産者のところに行くだろう。あるいは、生産者が少し譲歩して「83」と言い、取引が成立するかもしれない。いずれにせよ、取引が決着すると、仲買業者はたいていあいさつもなく立ち去ってしまう。

このように見ると、市場のことばはとても貧しいと感じるだろう。ことばは、微妙な感情を表現したり、風景の美しさを描写したりできる。しかしここでは、そんなことばの豊かさは関係ない。取引が終わるころ、市場からは朝日に染まる古城が見えるが、誰もその美しさをたたえたりはしない。関心は、今日の値段が上がったか下がったかだ。もちろん、取引の前後には、みんなカフェに集まって、ありとあらゆる話題に花を咲かせてはいる。しかし、肝心の取引の場面では、ことばは利益を追求するための道具へと切り詰められているように見える。

しかし、一見貧しく見える取引のことばにこそ、豊かな意味が込められているのかもしれない。ことばは、現実を描くためだけではなく、それをとおして何かを「する」ものでもある。例えば「絶対に迎えに行くよ」と言うとき、人は「約束する」ことをしている。さらに、そう言うことで「友情を確かめる」こともできるだろう。このときことばは、言外のメッセージを伝えている。市場のことばもそうではないか。市場の駆け引きは、「自分たちは平等だ」というメッセージを伝えているのではないか。わたしは、市場に親しむにつれて、そう感じるようになった。

生産者たちに話を聞くと、はるかに財力のある仲買業者とも対等に渡り合える市場のしくみに、彼らが深い愛着をもっているとわかる。誰にも従う必要はなく、自分の生産物の値打ちを守れるのがいいのだと、彼らはしばしば言う。市場での生産者の無骨なことばは、そのようなプライドを反映している。市場では、日常生活では失礼にあたるはったりや嘘（うそ）もある程度許される。そのような駆け引きをとおして、自分たちがお互いに競い合う平等な存在であることを、彼らはほとんど演劇的に示そうとしているのだろう。ただし、この「プレイ」は、ときに本気の喧嘩（けんか）へと発展してしまうのだが。

このように考えると、貧しいことばの豊かさが見えてくる。大げさにいうならば、市場で口にされる数字は、人びとの社会的理想のあり方さえ表現しているのだ。

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00～17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2022年2月号

第46巻第2号通巻第533号　2022年2月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　齋藤晃　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせや感想は、国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆油由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC FSC® C013678

VEGETABLE OIL INK

月刊みんぱく

2022年
2月号

編集後記

故佐々木高明は第2代国立民族学博物館長（1993～1997年）であり、創設期から梅棹忠夫（うめさおただお）初代館長を支えつつ、照葉樹林文化論に代表される数多くの業績を残した。特筆すべきは、中国西南部から台湾を経て日本の南西部にいたる一帯が共通する文化をもつという説から、日本文化の独自性と東アジア地域へひらかれた性格を明らかにしたことである。

昨今、日本文化を自画自賛する類いの言説が流布している。1998年にフランスで開催されたサッカーワールドカップでの日本代表の敗北と日本人観戦者の礼儀正しさが話題になってから、テレビでも「素晴らしい日本文化」について外国人に語ってもらう番組が人気を集めている。これも若者の海外旅行離れや、保守化と並ぶ自己閉鎖のあらわれだろうか。とらえ方はさまざまだろうが、文化を情緒的に肯定しようとする姿勢の高まりを感じる。

佐々木元館長が、日本を固有文化論からだけではなく、地理学や生態学を含んだ文化人類学的な見地からとらえ、東アジアの文明圏の一部であると主張したことを、あらためて考えさせられる。（三島禎子）

次号の予告 3月号

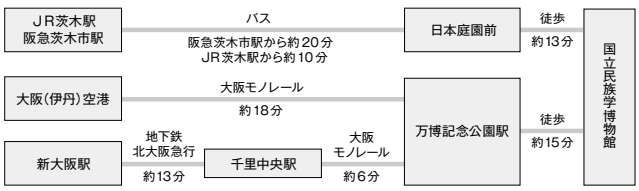
特集「新たなモンゴルとの出逢い
――ウランバートルの100年前と今」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00～17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日～1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/